

愛してると言いなさい 2

アルディ▼

紅緒を「お姉さま」と呼んで慕う貴族の令嬢。故郷に婚約者がいる。

ラヴェル▲

リゼの第4弟子。アルディにべた惚れ。

カトラー ▲

ジークウィーンの側近。宮廷内モテランキング不動の第2位。

◀ダナン

国王アワードの側近。宮廷内モテランキング不動の第1位&宮廷危険人物指定第1位。

ジーチェ▲

紅緒の専任侍女。控えめ・慎重・冷静・謙虚で、侍女の鏡。

リゼ▲

ダスタ・フォン国建国にも関わった大魔法使い。年齢不詳。ベニオが大好き。

▲ジークウィーン

ダスタ・フォン国の王子。筋金入りの女嫌いだったが…

◀チビクロ

ベニオの愛猫。

相良紅緒▲

リゼの助手兼ジークウィーンの交際指南役。普段は普通のOLとして働いている。色恋沙汰にはうとかったが、最近ちょっと変化が…!?

登場人物
紹介

目次

第一章	深まりゆく絆	7
第二章	心ひらいて	60
第三章	誰にも譲れない	169

〈正しい結婚をするための七つの課題〉

- 一、挨拶をしましょう（笑顔を大事に）
- 二、眼を見て会話をしましょう（感じよく）
- 三、お茶を飲みましょう（振る舞いは適切に）
- 四、デートをしましょう（手を繋いで）
- 五、ダンスに誘いましょう（キスは優しく）
- 六、口説いてみましょう（告白は真剣に）
- 七、求婚をしましょう（心を込めて！）

第一章 深まりゆく絆 ～課題その三・お茶を飲みましょう～

一

大魔法使いリゼ・クラヴィエは、朝からすこぶる機嫌が悪い。

書物の山と地図や研究資料、実験器具、魔法道具、ガラクタ、その他諸々が散らかる研究室の片隅で古びた肘掛椅子に座り、リゼは無言のままずっとなにかに腹を立てている。

リゼの第四弟子であるラヴェル・イングレッサはそれを横目で見ながら、師の機嫌がよろしくない理由を推測した。

目下の研究は『この世界』と『別の世界』を隔てている『境界』への侵入魔法と空間結合——即ち、『両方の世界を自在に行き来するための方法』を探っているのだが、その成果がはかばかしくないことが原因だろうか？ いや、それとも。

「師よ、お疲れのようですね。ベニオ殿となかあったのですか？」

尊敬する師リゼの研究助手である『ベニオ殿』は異世界人で、リゼの思いびとだ。黒髪にぱっちりした黒い瞳の、小柄でとてもかわいらしい女性だ。

師の話によると、はじめて召喚したその日より『ベニオ殿』は定期的に『あちら』と『こちら』を行き来していて、『こちら』に滞在するときリゼとひとつ屋根の下で一緒に夜を過ごしているらしい。にもかかわらず、もう四年も片思いをしているというのだから、どれだけ辛抱強いのかと呆れてしまう。

だがどうとう一線を越えるべくして越えたのかもしれない。

ラヴェルが片眼鏡モノクルの奥の瞳を期待に輝かせ、わくわくしながら追及してみると、即座にもものすごい険のある眼で睨まれた。同時に研究室中のありとあらゆる物がカタカタと振動しはじめる。

無視されるかと思いきや、リゼは苦みを帯びた声で言った。

「……昨夜は少しベニオの様子がいつもと違っていて」

「ふんふん」

「キスしてもいいと言うからキスしたら拒まれなくて」

「おお！ そ、それで？」

「気持ちよさそうにうっとり口を開いて応えてくれた」

「ではついにうまくいったんですね！ おめでとうござ——」

万歳三唱をしようとしたラヴェルの前で、部屋中の物がぶわつと一気に持ち上がり、天井に叩きつけられる。薬品を入れた瓶が割れて中身が飛び散って、凄まじい悪臭が漂った。

ラヴェルは「うっ」と鼻を摘むが、リゼはそのまま激昂中だ。髪を掻き毟り叫ぶ。

「いつてないっ！ せつかくいい雰囲気になったから、こっちもその気になったのに、いつのまに

か寝ているんだ！ ありえない、そうだろうか？」

「ありえませんが、ベニオ殿はひどい！」

「ひどいだろう！」

「ひどいです！」

「でもかわいいんだっ」

リゼがわつと膝に顔を押しつけて泣くと、天井に張りついていた物がぼとぼと落下した。

ラヴェルは落下物の方向を魔法で変えて難を逃れつつ、もぐもぐ、ぶつぶつ不満をこぼすリゼのもとに行く。

「口を半開きにして寝ているところも下がった眉尻もころんと寝がえりを打つところも、きれいな背中や小さい胸もかわいくてかわいくてかわいくてかわいくて、あーっ」

「……それでいたしてしまっただけですか？」

「できるわけないだろう！ そんな真似をしてバレてみる、嫌われるかもしれないじゃないか！」

「……このドヘタレ魔法使いめ」

「なんだって？」

「いやいや、独り言です」

女々しい態度でさめざめと泣くリゼに罵倒を浴びせたい気持ちをもぐと堪え、ついで同情の溜め息を吐く。ややあつてラヴェルは救いの手を差し伸べた。

「手紙でも書いたらどうですか」

「……なんだって？」

「これでも考えたんですよ。ベニオ殿に師を好きになってもらうにはどうするか。前にも言いましたけど、小細工はよした方がいいです。だったら直接胸の内を形にして届けるのが一番です」

「ベニオに手紙……」

「書いたことは？」

「ない。いつも一緒にいるんだ、必要ないだろう」

「師よ。いつも一緒にいるだけなら『お父さん』じゃないですか」

「げほうっ」

「やはりね。ベニオ殿にも言われたことがあるでしょう」

痛いところを衝いたらしい。リゼはまたもしくしくと泣く。

ラヴェルは身を屈めてリゼの肩をポン、と叩いた。

「ここはひとつ、騙されたと思って毎日手紙を書いてください」

「毎日だと？ そんなになにを書くんだ」

「なんだっていいんです。とにかく自分の気持ちを伝えるんです。それを誰か——ジーチェがいいでしょう。彼女に頼んで届けてもらいなさい。一日一通書くのが億劫ならば、書き溜めてまとめて託しておけばよろしい。かえってその方がいいかもしれないですね」

ラヴェルはここで声の調子を落とした。

「——いつも書く暇があるとは限りませんし」

リゼの気配が一瞬にして変わる。

「気づいていたか」

「そりや気づきますよ、私は優秀な弟子ですから」

リゼは嘆息して、気だるげに立ち上がった。

「わかった。やってみよう。手紙を書く」

「そうそう。まずは心の距離を縮めることが大事です。身体の距離に関してはまた別の機会があるでしょう、たぶん」

「手紙に花を添えるのはどうだろう」

「いいですね！ 一輪とか、おおげさでない方がよろしいかと」

リゼは頷くと、軽く手を振って、床に散らばっていたすべての物を元の位置に戻した。

「——まもなくルシターが眼を醒ます。警戒を怠るな」

「仕事はどちら優先で？」

「どちらもやれ」

「そうおっしゃると思えましたよ。はいはい、私は勤勉な弟子ですからね、我が師のためならば骨身を惜しまず働きます」

「ベニオを守れ」

「必ずや」

肩をわずかに落としたリゼは、蕭然としているように映った。

理不尽なものだ、とラヴェルは苦々しく思う。身体の傷はいつか癒えるが、心の傷はそうはいかない。あれからかなりの時が流れたが、リゼの心はいまもまだ血を流しているのだろう。無二の友であり相棒でもあった人物を失くしたりリゼの悲しみはどれほど深かったのか。

師リゼと肩を並べるに足るただひとりの大魔法使い——ルシター・スニ。

もう遙か昔——まだダスタ・フォーンの建国前だ——大陸中が覇権を競う大きな戦いがあった。多くの人血が流れた長き戦に終止符を打ったのは二人の大魔法使い。

それがリゼ・クラヴィエとルシター・スニだった。

二人の尽力の甲斐あって、まもなく大陸は平定され、国家は統一された。

だが代償もあった。ルシターは精神に異常をきたした。大戦のあと、正気を失ったルシターをなんとか元に戻そうとリゼは死力を尽くしたが、ついにそれはかなわず、ルシターは狂ったまま眠りにつき、夢を見続けて現在に至っている。

時折思い出したように眼を醒まし、狂気に任せて力を行使する。それはたいがい度を越した破壊の魔法だった。そのため彼の覚醒の兆しを察知するたび、被害を最小限に抑えるためにリゼが動く。以前のルシターでは考えられないような凶行の数々に、リゼは力をもって対処する。冷静かつ徹底に対応するその姿は頼もしく、尊敬に値するものだったが、ルシターの変わり果てた姿を見つめるリゼの眼差しは悲愴で、ラヴェルも辛い思いをしたものだった。

ラヴェルは腹に力を込め、わざと騒々しく振る舞うことにした。

「ですが、それはまだ先のこと！　いまは結界を強化し、様子見をするだけで十分でしょう。と

もかく！　万全の準備を整えるためにも、たまりにたまった仕事を片付けましょう、そうしましょう！」

「疲れた。今日は休みたい」

「なにを言っているんです。デキる男はモテる男への第一歩です。デキる男に女は弱いもの。我が師に不可能などありません。境界を越える道を開くくらいできますとも！　さあ頑張りましょう！」

二

午後二時、第二書斎室。

お茶の用意が整ったテーブルの周りに椅子が配され、そこに座る者たちは思い思いに寛いでいる。リゼがこの場にはいないことに、相良紅緒はほっと胸を撫で下ろした。

夕べはよく眠れた。目覚めるとすつきりしていた。それはいい。よくないのは、昨夜もリゼのキスの雨を浴びながら寝てしまったという事実だ。思い出すと顔が火照る。それは不純なキスではなくて親愛の情を表すものだけけれど、でもキスはキスで……。紅緒としては恥ずかしさ半分、困る気持ち半分だった。こんな状況でリゼと顔を合わせたらどうしようと思っていたのだが……。いなければいけないで寂しいなんて、自分はどうかしている。

しっかりしなきゃ。

紅緒はダスタ・フォーン国王アワードと王妃カルバロッサの頼みにより、先日より王子ジークウイーンの『女嫌い』を直すべく『交際指南役』として王宮に詰めている。

交際指南役などいたいような肩書だが、教鞭きょうべんを執とっているわけではない。

ジークウイーンの女性を毛嫌けがいする姿勢を改めさせるためには、まず女性に慣れてもらうことが必要だった。そのために紅緒はまず、できるだけ一緒にいる許可を得て、そうするよう努めた。

やがて少しずつジークウイーンも歩み寄りをみせ、王妃カルバロッサによる『完壁なる王子計画』の『正しい結婚をするための七つの課題』のうち、『挨拶をしましょう』と『眼を見て会話をしましょう』の二つの課題が終了した。いまは第三課題『お茶を飲みましょう』をやり遂げるために仕事内容を詰め、スケジュールを調整している。このまま七つの課題すべてを蒼月祭までに終了させるのが目標だ。ちなみに蒼月祭カグツキスツギマツリというのは、夏と秋の間に三日間だけ訪れる蒼あおという特別な季節に開催されるお祭り、蒼い闇と蒼い月のもと恋人たちは深く愛し合うらしい。

第三課題の舞台となるお茶会——ジークウイーン主催のガーデンパーティは既に日時も決まって方々に招待状が送られている。細かい打ち合わせを進めている部門もある。それなのにここに来て王子が「開催日を延期しろ」と言い出した。それで紅緒が急遽きゅうきょ、皆を召集し、こうして王子の話を知っているのである。

「どうして今更そんなこと」

「……『どっつて』だと？」

「なにが気に食わないんです？」

ダスタ・フォーン国第一王位継承者ジークウイーン・テラ・リュッセル・ダスタ・フォーン王子は、眉根を寄せ険しい顔をつくって無言で凄すこんでくる。紅緒より三歳年下の二十一歳、銀色の柔らかな髪に誇り高い紫の瞳で、王妃カルバロッサの華やかな美貌をそのまま受け継いでいる。美しく繊細な顔立ちとは反対に体格はしっかりしていて、肩幅は広く、胸は厚く、手足も長い。今日はこちらの世界の日常着である黒のラミザイを着用し、黒いブーツを履いて愛用の長剣を腰はに佩はいている。紅緒の斜め向かいの椅子に座った彼の声は、刺々しつとげしいこと極まらない。

「……確かに私は会の主催者となることに同意した。だが、独身令嬢全員をエスコートするなどという話は聞いていない」

「全員じゃありません。希望者です」

「同じことだ」

それはそうかも、と内心同意する。

困ったな、と肩をすぼめて黙る紅緒に、ジークウイーンが冷然と選択を迫る。

「会の延期か、エスコートの撤回か、どちらか選べ」

とりつくしまもないとはこのことだ。

だがそんなジークウイーンを「こちら」と横から軽くたしなめたのは、貴族位第二十五位の大貴族カトラー・ヴァン・クロードル。彼はジークウイーンの側近で二十七歳、鮮やかな濃い色の金髪と吸い込まれそうなほど深く澄んだ青い瞳、半微笑を浮かべる薄い唇が印象的な人物だ。どこでなにをしてもたいてい悠々と構えていて、女性問題を別にすればおおよそ欠点らしい欠点が見当

たらない。今日はサックスブルーの長い袖が優美なサラエンをさらりと着こなして、紺色の飾り帯を締めている。

「女性に対してそうぶしつけな口をきくものじゃないよ。だいたいエスコート案に関してベニ才殿を責めるのはお門違いだ。私の発案なのだから」

「なんだと」

気色ばむジークウイーンに、爽やかな弁舌でカトレーが返す。

「君にエスコートしてもらいたいという嘆願状が後を絶たなくてやむを得ず、さ。まあ、第一課題と第二課題の復習にもなることだし、皆仲よく一度にお相手すれば喧嘩にもなるまい。君もいつまでも女性が苦手などと青臭いことを言つてないで、これを機に腹を括くくって克服すべきだ。違うかい？」
ぐつ、とジークウイーンが言葉に詰まる。

にこ、とカトレーが他意のない、澄んだ微笑を浮かべた。

「ベニ才殿はもとより、大勢の人間が君のために色々考えて動いてくれているのだから、少しはまともに応じなさい。それで？ ベニ才殿、他にも相談があると言つていたね。なにかな？」

「あ、はい。提案なんですけど、私たち主催者側の衣装を統一するというのはどうでしょう。そうすればお客様にも一目でわかりますし、なにかと声もかけやすいんじゃないかなって」
「なるほど」

そこへ「すてきですよ！」とかわいらしい声が弾ける。両手の指先を合わせて笑ったのは、紅緒を「お姉さま」と呼んで慕う、アルディ・ドオワ・デュイ。貴族位第三十四位の大貴族で王妃付

き侍女を務めている十七歳。明るい金髪はくるくる、ふわふわで、緑の瞳はいつも元気いっぱいだ。貴族服であるスィーラを纏まとい、飾り玉と羽のついた紅い紐を腰に結んでいる。

「皆でお揃い！ 嬉しいですよ！」

「夏なので明るく目立つ配色がよろしいのではないかと」

さりげなく賛同の意を表したのはジーチェ・タージュ。もともとはカルバロツサ王妃の侍女で、いまは紅緒の専任侍女として色々と手助けしてくれている。年齢は二十六歳。いつもきちんとした身なり、薄化粧で、長い金髪を三つ編みにしてきっちり結び上げている。琥珀色の瞳は常に冷静沈着で、謙虚で控えめ、言動は慎重そのもので口が固くとても頼りになる存在だ。

そして紅緒の太腿の上で長い尻尾を抱くようにしてくりと丸くなっているのは、愛猫のチビクロ。真っ黒な小さい猫で『契約の猫』と呼ばれる守護族らしいが、詳しいことはよくわからない。チビクロも片眼を開け生あくびをして、「に」とかわいらしく鳴く。

しかめ面で腕を組むジークウイーンに、紅緒は声をかけた。

「エスコート、どうしてもいやですか？」

訊くと「わざわざ口にするまでもない」という眼で激しく睨にらまれた。

「先日の舞踏会で私がどんな目に遭ったのか、よもや忘れたわけではないだろうな」

未来の妃の座を巡って壮絶な王子争奪戦が繰り広げられた一夜は、記憶に新しい。あのときは紅緒もなぜかたたくさんの男性に囲まれ、大変怖い思いをしたのだ。だが――

「忘れていません。でも今度は大丈夫です」

ここで負けてはいけない、と真つ向から見返し、紅緒は声に力を込めて言った。
ジークウィーンは「ふん」と鼻で嘲笑う。

「なにがどう大丈夫なのだ、言ってみる。私が納得できたらエスコートでもなんでもやってやる」
「私が王子を守ります」

毅然と述べたつもりだ。だが「あはっ」とまずカトレーが吹き出し、アルデイは「さすがお姉さまですの！ 恰好いいですよー！」と手を叩いて喜び、ジーチェはくすりと忍び笑う。肝心のジークウィーンはこめかみに怒気を示す青筋を浮かべてわなわなと震えていた。

「……そなた、私をなんだと思っているのだ」

「王子です」

とうとう堪え切れないといったようにカトレーが「あつはつは」と大笑い。ジークウィーンにティーカップ（空でよかった）を投げつけられたが、笑いながらもぼし、と慣れた手つきで受け止めている。

ジークウィーンは怒り狂ったまま身を乗り出し、テーブルをばんと叩いた。

「ふざけるな。言うに事欠いて『私を守る』だと？ 女に守られる男がどこにいる！ この、たわけ！ もうよい、ガーデンパーティーは中止だ！ 真面目にやっていられるか。私は仕事に戻る」

「待ってください。まだなにも真面目にやってないでしょう。それなのに逃げるんですか？」

勢いよく立ち上がった部屋を出て行きかけたジークウィーンが、怒り心頭の面持ちで振り返る。

「逃げるだど？」

「そうです。逃げ以外のなにものでもありません。先程カトレー様もおっしゃっていたとおり、もう着々と準備が進められているんです。招待状も送付済みですし、食材の手配や、人事の調整、両陛下、王太后陛下も楽しみにされています。王子主催のガーデンパーティーを、なんとしてもいいものにしようとは皆一生懸命です。私たちも含めて。それにさきほどのことは、言葉が悪かったのかも知れませんが、すみません。でも気持ちには本当です。たくさんの女性をエスコートするなんて大変かも知れませんが、もみくちやにならないように私が皆様を説得します。だから一緒に頑張りますか？」

紅緒は必死だった。自分の一言で大勢の人間の努力が無になるなんてひどい話だ。なんとか説得しなければならないと、熱意を込めた眼でジークウィーンの瞳をじつと覗き込む。

そのうちジークウィーンの厳めしい表情がほぐれていく。ついには根負けした、というそぶりであつて、天井を仰ぐと、ジークウィーンは重い溜め息を吐いて席に戻った。

「……そなたのその眼に弱いのだ」

「え？」

「なんでもない。わかった。エスコートは引き受ける」

カトレーがにやにやし、唇に指をあてる。

「ふふふ。女性に勝ちを譲るとは恰好いいなあ、ジーク」

「なにが『ふふふ』だ。ひとを冷やかすな」

気兼ねなくものを言い合う主従に、紅緒はほつとした。実際なぜジークウィーンが折れてくれた

のかはわからないけれど、なんとかガーデンパーティは中止にならずに済んだようだ。

紅緒は、肩によじ登り「にー」と頬に擦り寄るチビクロを「よしよし」と撫でてから、浅くお辞儀した。

「では王妃陛下にご報告に行つてきます」

ジークウイーンの気が変わらないうちに、とはあえて言わないでおく。

「なぜ母上に？」

「そもそもガーデンパーティを提案してくださったのは王妃様ですし——『エスコート』の件も含めて開催をとて心配しておられたので」

「ならば私も行く」

ジークウイーンは先に立ち上がり、紅緒を促した。出ていきかけて立ち止まる。

「……忙しいところすまぬが、皆、よろしく頼む」

全員の間が点になる。思いがけない一言だった。

「なにをしている。行くぞ」

「あ、はい」

最初は大股に歩いていたジークウイーンだが、紅緒が小走りですついてくるのに気づくと歩調をゆるめ、肩を並べるようにして歩く。いままでになかったことだ。

「おい、なにを笑っている」

「……嬉しいんです。ちょっとは私も認めてもらえたのかなつて」

ジークウイーンは答えない。だが否定もされなかった。だからといって受け入れてくれたわけではないのだから。けれど。

思うようにいかないな、と紅緒は隣を歩くジークウイーンを眺める。まっすぐに伸びた背筋、高潔で強気な眼、見とれるくらい整った容貌……天は二物を与えずなんて嘘だと思ふ。きれいで、賢くて、身分と地位もあつて、将来は王位に就くとなれば、女性が放つておくはずがない。問題はこれとつつきにくい性格だが、もう少し視野を広くして、たくさんひとと接し、生きることを楽しみ、よく笑うようになれば、自然と親しみやすくなるに違いない。

そうすればきつといまよりずっとすてきになるだろうな、と思ふ。

歩み寄りたい。そのためには会話が必要だ。紅緒はちよつと考え、だめもとで訊いてみよう、と意を決して「あの」と声をかけた。

「さっきの件ですが、王子はなぜ私に『負けて』くれたんですか……?」

ジークウイーンが紅緒を横目で見た。だがすぐにはふいつと視線を外す。その眼元がやや赤らんでいた。照れているようにも見えるのは気のせいかな? と紅緒は首を傾げた。

ややあつて、言葉を探しあぐねたのか、そっぽを向いてジークウイーンが呟いた。

「……そなたが相手だからだ」

「そうなんですか?」

ジークウイーンの率直な返答を紅緒は好ましく思った。なんとなく心とらぐ。た、と足取り軽く紅緒はジークウイーンの前に躍り出た。

「私が指南役だから気を遣ってくださいです。ありがとうございます、ちょっと嬉しいです」
「待て。そういう意味では——いや、まったく違うわけでもないが……っ」

「はい？」

「っ。ええい、もうよい」

ジークウインが大きな手でぐしゃぐしゃと頭を掻きまわした。なにか言葉に出せない葛藤かつどうがあるらしく、表情が苛立たしげだ。急に大股になったジークウインに置いていかれそうになり、紅緒は早足で追いかけた。

若干気まずい雰囲気のままカルバロツサ王妃を訪ねたが、あいにく不在だった。

「仕方ない、母上には私から話しておこう」

「すみません。お手数おかけいたしますが、よろしくお願いします」

戻るころには気分も落ち着いたので、ジークウインは再び紅緒の隣を歩いていった。「そういえば」と切り出される。

「父上に聞いたのだが、そなた二十四だそうだな」

「はい」

「私より三つ年上だ」

「それがどうかしましたか？」

年齢などいちいち言うこともない。

だが、ジークウインは面白くないようで、あからさまに不機嫌そうだ。

「私は知らなかった。他にも皆が知っていて私だけが知らないことがあるのか？ もしあるならば、私にも話を聞かせる。なんでもだ。だいたいなぜ私だけがのけものに——不公平だろうが」

真面目くさった顔でぶつぶつぼやくジークウインは少しかわいい。

もしかして、このことを言うために一緒についてきたのかもしれない。

紅緒は明るい気持ちになった。相手のことを知りたいと思うのはいい傾向だ。これをきっかけに少しずつでも他人に心をひらくようになるかもしれない。

そうなったらしいな、とひそかに願いつつ、紅緒はジークウインを見上げて言った。

「私の話なんて聞いてもつまらないと思いますけど、それでもいいんですか？」

「つまらなくはない。そなたさえよければ、その、そなた自身の、は、話を聞きたい」

「……えーと、では夜はどうですか？ 就寝前に少しだけおしゃべりするんです。お部屋は近いし、私と王子だけなら問題ですけど、リゼもいれればいいでしょう？」

ジークウインは「ああ」とぶつきらぼうに応じたが、顔には喜色が浮かんでいる。その機嫌のいい横顔を見ながら、もしかしたらリゼと喧嘩になるかもしれないな、と直感した。

だけど犬猿の仲の二人が、これを機に少しは仲良くなればいい。そのために自分になにかできることはないかなあ、と紅緒はひそかに考えた。

「いい気持ち」

紅緒はバルコニーの扉を開けて朝の新鮮な空気を吸い込んだ。空は快晴、風は清々すがすがしい。夏の陽光が眩まぶしくきらめいている。屋外で催し物をするには最高の日和だ。

「さて行きますか」

紅緒は左腕に王家の紋章の入った腕章を嵌はめた。用意したラミザイは鮮やかな深黄色。靴も帽子も同じ色だ。腰にはピーコック・ブルーの飾り紐を結ぶ。特別接待役の衣装だ。

この日のために最善を尽くした。

ジークウイン主催のガーデンパーティ。主賓はアピオン王太后、そして両陛下。招待客はおよそ千余名。開始時刻は正午。それまでにやらなければいけないことが山ほどある。

リゼは既にいなかった。警備責任者を任されたので、一足先に会場入りしたのだろう。チビクロも見当たらないが、まだどこからともなくひよっこり現れるに違いない。

ノックがあつた。返事をする、ジークエが爽やかな挨拶と共に顔を出す。

「おはようございます、ベニオ様。お迎えにあがりました」

「おはよう、ジークエ」

ジークエはきちんとお辞儀をすると、両手を差し出す。

「リゼ様よりお届けものです」

「ありがとうございます。これ私の分です。お願いします」

「確かにお預かりいたしました」

紅緒が受け取ったのは一通の手紙と一輪の蜂蜜草。代わりにリゼ宛ての手紙をジークエに託す。

リゼから手紙が届くようになったのは、ついこの間のこと。文面は他愛のない事柄ばかりだが、リゼらしいといえればリゼらしい。最初は毎日会っているのに、なんでわざわざ？ と怪訝けげんに思ったものの、いまはひよんなことからはこの文通を楽しんでいる。

紅緒は封書を懐ふところに大事にしまい、花は小卓の上の花瓶に挿した。

「お待たせ」

「では参りましょうか。その衣装よくお似合いです」

「ジークエもね」

二人で「ふふ」と笑う。今日はリゼ、アルデイ、ジークエ、カトレー、皆揃いの出で立ちだ。

会場は中庭から中央大花壇までとその付近一帯。真っ白い治道は準備に追われた関係者で大混雑している。左側の治道は通行専用で、庭園見学の屋根なし四輪馬車が十台待機している。その他にも移動用の輿こしや馬が多数控えていて、身なりを整えた御者らと従者らが打ち合わせの真っ最中だ。右側の治道には大中小の日除け天幕が所狭しと張られている。

「大天幕はお食事処です。中天幕は休憩所。小天幕は歓談用です。そしてあちらの紫の天幕が王太

后陛下、その隣が国王陛下と王妃陛下、斜め向かいにありますのがジークウイーン殿下の天幕です」
ジークエの指さす先は薔薇園手前の広い空間で、あちこちに黄色い薔薇と黄色い百合を組み合わせた花輪が飾られ、一際華やかな演出がされている。

紅緒の今日の役目はカトラーと同じ、ジークウイーンの補佐役だ。この会場で六十七名の貴族令嬢を接待しなければならぬ。

「私は飲み物を配りながら会場を巡回いたします。なにかお困りの際はすぐにお呼びください」
控えめながらも、ジークエは本当に頼もしい。

紅緒がそう言うと、ジークエは口元に手をあて、はにかんだ笑みを浮かべた。

「お姉さまあー！」

アビオン王太后の天幕の内装を調べていたアルデイが、目敏く紅緒の姿を発見して駆け寄ってくる。

「おはようございますの！」

わっと首に飛びついてきたアルデイを、紅緒はなんとか抱き止めた。

「おはよう、アル」

「お姉さま、衣装お似合いですの！ お揃いで嬉しいですよ！」

「うん、アルもとってもかわいい」

「ありがとうございますですの！ 本日アルは誘見誘導担当ですの。頑張りますのっ」

「暑くなりそうだから、水分補給を忘れないで。日射病にも気をつけてね」

「はいですよ！ ではでは、まだやる必要がありますのでアルは失礼しますですよ！」

紅緒はアルデイの元気な後ろ姿を見送ってからジークエと別れ、事前に手渡された図面を頼りにお手洗いや喫煙場所などの確認、託児施設や救助室、天幕の点検をおこなった。

「ベニオー！」

準備が整い、いよいよ開催時間が迫った。そろそろ整理してお出迎えかな、と周囲を窺った瞬間、声をかけられる。振り返るとジークウイーンとカトラーがこちらにやってくるどころだった。

「わ、なんです、その恰好」

紅緒の言葉にかちんとした表情を浮かべたジークウイーンを、「まあまあ」と軽く宥めてカトラーが答える。

「略式だけど王家の正装だよ。見るのははじめて？」

「はい。すてきですね」

心から褒めると、ジークウイーンの気持ちが引き立ったようだ。

「そ、そうか？」

紫の豪華なスィーラに濃紫の帯、紫の短い刺繍入り上着、銀の額飾りを締め、銀の耳環をつけている。さすがに今日は剣を帯びていないようだ。

「とてもきれいです」

「きつ……きれいとかなんだ！ せめて恰好いいと言えっ」

「きれいなものをきれいと褒めてなにがいけないんです！ ンもう、今日は怒らないでおこうと思つたのに、最初から台無しじゃないですか」

「それは私のせいかつ？」

「はいはいはい、待ったー。二人共、おとなげないからやめなさい。さ、時間だよ」

絶妙の間合いでカトレーが割って入る。

「ほら、行こう。じゃあまたあとで。今日はよろしく、ベニ才殿」

「はい。あの王子」

言うならいまいかない、と紅緒は思った。

ジークウイーンが憤懣ふんまんやるかたないといった眼で紅緒を見る。

「なんだ。さっさと申せ」

「今日は笑顔ですよ。感じのいい挨拶をして、眼を見て話すこと。講習会の成果を発揮してください。私、横でちゃんと見てますから」

すると驚いたことにジークウイーンが不機嫌そうな表情を打ち消して、不器用ながらも笑顔を返してきた。

「ああ、承知した」

突然、大きな歓声が上がった。視線をそちらにやると、人混みの中に二人の宮廷魔法使い、リゼとラヴェルがいた。

リゼの金色の髪が光に透けてきらきらしている、いつもは黒一色の恰好なのに今日は皆と同じ深黄色のラミザイにピーコック・ブルーのベルトを締めている。それが意外にも似合っていて、ちよつとだけみとれてしまった。紅緒は四年前にリゼに召喚されて以来、週末のたびに境界を越え、こち

らの世界でリゼの助手をしている。だが、ジークウイーンの交際指南役を引き受けたことにより目下のところ助手の仕事は実質休止中だ。

ラヴェルはそんなリゼの四番目の弟子だ。今日は脇に長い杖を抱えて、見慣れない長衣を纏まとっている。リゼよりも背が高く、ひよろりとした細身の彼は、常にどこかひとを食った表情をしている。紅緒に気づいたりリゼはぼつと嬉しそうに眼を輝かせ、いそいそとこちらにやっこようとして首根っこをむずとラヴェルに掴まれている。紅緒はクスツと笑い、「頑張つて！」と手を振った。ラヴェルは紅緒に向かって会釈えいせきすると、ぶんぶん和大仰に腕を振り回すリゼを引きずるようにして警備担当者の詰め所へと連れていく。

「ジーク」

「わかっている。時間だな。主賓を迎えに行くでしょう」

そう言つてジークウイーンは踵かかとを返した。その背中に、紅緒は慌てて声をかける。

「頑張りましょうね、王子」

すると思わぬ反応が返ってきた。

「――あとでそなたをおばあさまに紹介する。そのつもりでいろ」

十五分後、正午を知らせる大聖堂の荘厳な鐘の音がラッセンシエル中に鳴り響いた。と同時にガーデンパーティ開催を知らせるラッパが高らかに吹き鳴らされる。白いバラソルの花が咲く。音楽隊が演奏を開始する。そんな中、淡い装いの招待客が入場しはじめ、互いに顔見知り挨拶を交わし

ながらゆるゆると広がっていった。会場はたちまち招待客で埋め尽くされる。その隙間を縫うように給仕たちが行き来する。ジーチェもまた銀のトレーを片手に、いつもの控えめな笑みを浮かべて冷たいレモン水を配り歩いていた。

「本日の謁見は事前にお知らせしておりますお時間でお願いますですのー！」

華奢な身体でびよこびよこ跳ねながらアルデイも早速奮闘している。

そして紅緒はジークウイーンが大貴族の面々と挨拶を交わしている間に、エスコート希望の総勢六十七名の女性陣を少し離れた場所に集めて深々とお辞儀した。

「はじめまして、ベニオ・サガラと申します。ジークウイーン殿下の交際指南役を務めております」と、簡単に挨拶し、姿勢を正して注意事項を伝える。

争わないこと、いがみ合わないこと、誰かを貶める発言は控えること、王子の隣を独占しないこと、むやみやたらに王子にくつつかないこと、節度を守ること、等々。

最後に紅緒は「こだけの話ですけれど」と、内緒話を打ち明けるように囁いた。

「どうも殿下は追われると逃げたくなる方ですよ」

絢爛華麗に装った、顔も身体も美しい女性たちが「まあ」と眼を丸くして互いに顔を見合わせる。紅緒は視界の端にジークウイーンを捉えたまま続けた。

「先日の舞踏会の折もそうでしたけど、しつこいのは苦手とのこと。カトレー様がおっしゃるには、殿下は追われるより追う性質で、自分に興味のなさそうなひとに眼がいくそです」

これはカトレーから耳打ちされた確かな情報だ。ジークウイーンは冷たくされると逆に燃える性

分らしい。ひとでも物でも一筋縄ではいかないものに執着する傾向があるという。

「おかしいですよ。でも本当かどうかご自分の眼で確認してみてはいかがですか？ もしかしたら皆様の知らない殿下の一面が発見できるかもしれません。それに好きなひとに振り向いてほしい一心でしたことで相手を困らせてしまつては本末転倒です。末長いお付き合いを望むのでしたらお互いに尊重し合うこと、それが大切なのではないでしょうか」

紅緒は腕に下げている編み籠からリボン付きの花飾りを手に取り、ひとりひとりに配って歩いた。「いまお渡しした花飾りには番号が書かれた紙片が結ばれています。恐れ入りますがその番号の順にご挨拶願います。皆様で楽しく過ごせますようにご協力よろしくお願いたします」

エスコート希望の女性たちの他にもジークウイーンに謁見を願ひ出る者は多く、紅緒は人員整理の傍ら、様々な問い合わせの対応に追われた。思った以上に忙しい。家族連れも多かったため、迷子やちよつとした悪戯騒ぎも頻発した。暑さのため熱中症になる婦人や子供もいて、医者を呼んだり、別室を手配したりと息つく暇もない。

だが本当に大変なのは、ジークウイーンだった。

延々と繰り返される訪問の挨拶を穏やかにこなしている。令嬢方に話しかけられてもいやな顔をせず、笑顔で（やや強張っているがそこは愛嬌だ）応対しているのを見て、紅緒は嬉しくなった。講習会の成果がきちんと出ている。女性嫌いが解消される日もそう遠くないようだ。

「私ももっと頑張らなきゃ」

その後の二時間を紅緒はよく働いた。ジークウイーンの周りに集い、ともすれば度を越えた振る

舞いに及びそうな女性たちをさりげなく牽制し、ジークウイーンと話せない者がでないように時間を割り振る。順番待ちの方々とカトレー共々ジークウイーンの普段の生活やちょっとした失敗、嗜好や愛読書などについておしゃべりし、令嬢たちの体調を気遣った。

そうして食後のデザートの後片付けも済んだ頃には、あちこちでおしゃべりの輪ができていた。庭園をぐるっと一周する四輪馬車がごとごと走り、白馬に跨り散策を愉しむ紳士や、はしやぎまわる子供たち、リクエストに応える音楽隊や大道芸を披露する道化師たちで賑やかだ。

皆とても楽しそうだった。

紅緒はカトレーとジークウイーンの近衛兵に目配せすると、席を外した。ジーチェ他数名に声をかけ、手分けして会場の警護にあたっている憲兵に冷水を配ってまわる。

「どうぞ。お疲れさまです」

「ありがとうございます」

直前まで子供にねだられて肩車をしてやっていた若い兵士に、トレーに載せたグラスを差し出す。よほど喉が渇いていたのか、青年は一気に飲み干した。もう一杯勧めるとそれもぐいぐいと飲み干す。

「ああ、生き返った！ わっ！ あ、あなたは、ベニオ・サガラ様！」

「私をご存じなんですか？」

青年は飛び退き、あたふたと制服のよれを整えると、後ろで手を組み姿勢を正した。

「もちろんです。王宮であなた様を知らない者などおりません」

その答えに紅緒は驚いた。

「なぜですか？」

「ジークウイーン殿下の交際指南役だけでなく大魔法使いリゼ様の助手も務めておられるとか。宮廷はどこもかしこもあなた様の話でもちぎりです」

「まさか」

「本当です。ああ、ですが、あなた様には陛下の勅命で接触・接近禁止令が出ておりますので、ご存じないのも無理はありません。私もあなた様から声をかけてくださらなければこのように話などできませんでした……おかげで直接お礼を申し上げることができません」

おもむろに跪いて青年は頭を垂れた。

「あなた様がいらしてから殿下はお変わりになりました。国王陛下も王妃陛下も楽しそうで、王宮も明るくなりました。ありがとうございます。憲兵隊一同を代表し深く感謝申し上げます」

「そんな——顔を上げてください。私、特別なことはなにもしていません」

謙遜でもなんでもなし。本当にたいしたことはしていないのだ。焦る紅緒に青年がふつと微笑む。「あなた様は殿下に笑顔を与えられた……他のだの交際指南役殿にもできなかったことです。王家の方々の安寧を護るのが我々の務め。どうかこれからも殿下をよろしくお願ひいたします」

青年が一礼して立ち去ったあとも、紅緒は茫然として動けずにいた。

すると背後から不意に抱き寄せられた。苛立った低い声で耳元に囁かれる。

「……他の男なんて見ないでよ、面白くない。楽しそうだったけどなに話していたの？」

リゼだった。むくれて膨れっ面をしている。

「単なる世間話です。なにをそんなに怒ってるの？」

「嫉妬だよ！ 決まっているだろう！ 君が僕以外の男と親しげにするのがいやなんだっ」

あまりにも率直に告げられて、紅緒は言葉に詰まった。かあつと頬が熱くなる。

「なんでそこで赤くなるかな。ったく、もう。君はときどき変だよね」

手を掴まれる。なにげない動作なのにびくっとしてしまった。あの舞踏会の夜からこちら、リゼを意識してしまうことが増えた。紅緒は顔を曇らせた。こんなのは困る。リゼはいつもどおりなのでから自分も普通でいたいのに。

——気づかない方がいい。気づかなければいままでどおりの関係で傍にいられる。

紅緒は動揺から眼を逸らした。

リゼは紅緒の手を引いて、美しく咲き乱れる薔薇のトンネルを通り抜けていく。

「僕、君を呼びにきたんだ。泉水の前に皆集まっている。食事にしよう」

素っ気なくしゃべりながら、リゼはちらつと紅緒を一瞥する。

「……本当に、なにもなかったよね？」

疑う眼。剥き出しの嫉妬がくすぐったい。紅緒は思わず笑ってしまい、リゼの機嫌をますます損ねさせた。

「ベニオっ」

「はいはい、ごめんね。大丈夫、本当になにもなかったよ」

彼とはなにもない。だがリゼと繋いだ手のぬくもりは少し胸苦しい。

泉水は中央大花壇を抜けた奥、王宮の直線上にある。一番手前に最も大きい泉水、次に二番目に大きなもの、さらに奥に三番目に大きなもの、という具合に七つの泉水が並んでいた。そして最奥には専用運河がある。平らな水面に光が乱反射して眩い。

一番手前の大泉水は中央に七重の円形水盤があり、頂点には背中合わせに立つ二体の男性像がある。水中ではいまにも飛翔しそうなほど力強い金の竜の彫像が、幾体も口から水を噴いていた。

「お姉さまあー！ こちらですよー！」

広場の一角に張られた白い天幕の下に敷物を広げ、皆が寛いでいた。アルデイが勢いよく手を振っている。中央にジークウイン、その背後に背中合わせでカトレー、傍にアルデイ、アルデイのびつたり隣にラヴェル、ジークエは行ったり来たりしている。

さりげなくリゼと手を離す。途端に息が楽になった。紅緒は皆に笑いかけた。

「ごめんね、待った？」

「いいえですよー。お疲れさまですのー！」

「なにを召し上がりますか？」

給仕担当のジークエが、籠の蓋を持ち上げて中を見せる。中は、こんがりと焼けた丸いパンにさまざまな具材を詰めたパニーニでいっぱい。

「トマトと野菜とフレッシュチーズに、鳥、豚、牛、兎、桃色口裂けワニのいずれかの肉の薄切りを挟んでいます。どれがよろしいですか？」

桃色口裂けワニってなに。

すぐく気になる。でも食べるのはちよつと勇氣が必要だ。紅緒は迷った末、意を決して言った。

「桃色口裂けワニのパニーニをください」

渡されたのは具も桃色ならパンも桃色の、なんとも奇抜なパニーニだ。

「リゼ様は？」

「僕はいません」

「リ・ゼ」

軽く睨むと、リゼは渋々ながら「じゃあ、ベニオと同じものを」と言った。

紅緒はジークウイーンに手招きされたので、軽く会釈えしやくし空いていた向かいに座った。

「お疲れさまです、王子」

ジークウイーンの美貌がややくすんで見える。だいぶ消耗しているようだ。紅緒は精一杯元気づけようと褒め称ほめたえた。

「見ていましたよ。笑顔がとてもすてきでした」

「顔が疲れた」

ジークウイーンの素直なぼやきがおかしくて、紅緒は笑った。ほつとしたところで、いぎ、得体のしれない桃色パニーニに挑戦だ。ぱくりと一口食べる。

「わ。意外においしい」

見た目より淡泊で、触感も匂いも悪くない。しばし黙々と食事に専念したあと、紅緒は言った。

「顔が疲れるなんて、普段あまり笑っていない証拠です。日々をもっと楽しく過こせばいいんですよ」

「ではそなたがいつもくつついていればよかろう。それだけで私は面白おかしい毎日になる」

「あは。そんな冗談言って」

「冗談では——」

ちよつとむつとした様子のジークウイーンが身動きした拍子に、食べかけのパニーニを落としそうになって慌てる。

「ごぼしました？」

「……いや、平気だ」

紅緒は布巾を手に前に身を乗り出した。どうやら大丈夫のようだ。ふと気づけば、顔が近い。あやうく額がごつんとぶつかるところだった。ジークウイーンが慌てて身を引く。勢い余って、カトレーの後頭部に頭突きをくらわした。

「痛いな、ジーク」

「う、うるさい。黙れ」

「すごい音がしましたけど、大丈夫ですか？ コブができたんじゃない？」

紅緒は身を乗り出して、ジークウイーンの頭の後ろをそつと撫でた。途端にジークウイーンが硬直する。カトレーとアルディは瞳目どうもくし、ひゅうつと口笛を鳴らしたりにやにやしたりした。

いち早く紅緒を引っぱがしたのはリゼだった。

「なにをするの」

「それは僕のセリフだろう！ 男に簡単に触るんじゃないやありませんっ」

「ちょっと頭を撫でただけでしょつ。変な言い方しないの！」

「君の手は僕の手です！ 他の男に触れるなんて許せない！ 阻止！ 断固阻止！」

「私の手は私の手です！ きゃあつ、なに散らかしているの！ ンもう、食べ物や粗末にする人はおしおきですつ。後片付け手伝いなさいつ」

リゼがパニーニを握り潰し、レモン水をひっくり返したせいで、紅緒ばかりか、ジーチェの手まで煩わせることになった。わあわあやり合いながらも食事は進む。木の実と干し果物の焼きケーキをばくつく段階になって、紅緒はようやくラヴェルに話を聞くことができた。

「え？ 私の服ですか？」

「そう。ラミザイでもサラエンでもスイーラでもないでしょう？ なんの衣装なんですか？」

今日のラヴェルは足首まである貫頭衣に、踝まで届く裾広がりの長い袖付き上着を羽織っていた。頭には腰ぐらいまである長方形の被り物、額に複雑な文様の帯を締めている。すべて黒一色で、この夏の日中にあつてはとても暑苦しそうだ。そう言うとならラヴェルは平然と答えた。

「温度調整していますから」

ケーキをぐくんと呑み込んで、ナプキンで口と手を拭う。

「これは宮廷魔法使いの正装です。もつとも付属品は色々省いています。王家主催の行事に参加するときは、たいていこの恰好ですよ。といつても最近は出不精で、あまり着る機会ありませんでしたけど。それに夜会や舞踏会はまた別なので、この衣装のまま表に出ることはそう多くはないですね。今日だつてこれを着るのは本当は師の役目なんですけどねえ。私はいやだと言つたのに押

しつけられたんです」

「その杖は？」

「これは魔法使いの杖ですよ。あれ、ご存じないのですか？ 魔法使いは杖によつて魔法をより強力にすることが出来ます。杖はなくてはならないもの、身体の一部といつても過言じゃありません。

まあ、師や私などは杖がなくても、ある程度までは支障がないですけど。杖は階級によつて色と素材が異なりまして、駆け出しの魔法使いは木の杖、中級は鉄の杖、上級は赤銅の杖。それより上級になると銀、もつと上になると金です。ちなみに長さはそのまま力量を示します」

ラヴェルの身体の横に無造作に置かれている杖は、長さは身の丈ほどで色は黒だ。紅緒の疑問を察したのか、ラヴェルが杖を手取る。軽く振ると、伸びたり縮んだりした。

「これは星の杖。この大陸では私の他に三名が所持しています。私の兄弟子たちです」

「すごい杖なのね」

「いえいえ、師の杖には遠く及びません。師のそれは金の炎が輝く、それはそれは美しい金剛石の杖なのですよ！」

紅緒の脳裡を四年前、初めてリゼに出会ったときの情景が掠めた。あのとき確かにリゼはそれらしいものを手にしていた気がする。

「リゼ——」

訊ねようとして振り返つたが、いない。だがすぐに見つかった。眼の前の広場で、いつのまにか現れたチビク口と本気になって喧嘩をしている。そして掴み合い——もとい引っ掻き合いになり、

攻防の末、チビクロが戦略的逃亡を開始。リゼは追いかけて、泉水の周囲をぐるぐるとまわりはじめた。カトレーとアルディは囁かして、ジークウィーンは横になって休んでいる。

ジーチェは天幕の隅でかしまって待機、話を終えたラヴェルは、いそいそとアルディにちょっとしたかけに行行った。

「さて、と」

チビクロとリゼの仲裁に行こうと立ち上がりかけた紅緒の手首を、寝入ったと思っていたジークウィーンが掴む。

「放っておけ」

「でも」

「ここにいろ。まもなくおばあさまに面会に行く時刻だ。それまで好きにさせておけばいい」

紅緒は座り直した。なんとなくジークウィーンの顔を見つめる。

美形は得だなあ、とつくづく思う。なにをしても様になるなんて、ずるいことこの上ない。

「……あの」

「なんだ」

「手、放してください」

「いやだ」

聞き分けのない子供のよう、ジークウィーンはしっかりと紅緒の手を握ったままそう言った。

「誤解されませんか？」

一応周囲の眼を気にして紅緒が訊ねると、ジークウィーンは「ふん」と鼻で笑う。

「ベニオ」

「はい？」

「……そなた、令嬢方になにを話したのだ？ 皆やけにおとなしかったぞ。そればかりか、いつもは流行が云々どくだらぬ話題に終始するのに、今日は話の内容も多岐にわたり、なかなか興味深かった。中にはすこぶる頭の切れる才女もいた。そうそう、その才女はそなたの穏便な物言いや多勢が相手でも臆することのない度胸、加えて牽制しつつも敵をつくらないやり方にえらく感心していたな」

そんなふうに見られているとは思わなかった。紅緒は肩を竦めてかぶりを振った。

「牽制なんてそんな。過激で強引な行動を控えていただけよう、ちょっとお願いしただけです」

「私が『もみくちやにされないように説得』したわけだ？」

いつかの会話をなぞり、ニヤリとジークウィーンが笑う。それから眩しいものでも見るように眼を細めて、紅緒を注視した。

「……取り立てて変わったところがあるわけでもないのに……そなたといるとなぜこうも退屈しないのか不思議でならん。まあよい。いずれにしろ助かった」

その言葉は思いの外嬉しくて、紅緒は微笑んで言った。

「少しでもお役に立ててよかったです」

そうこうするうちに時間になったので、皆でアビオン王太后の天幕に足を運んだ。

アビオンは豊かな銀髪、鋭利な紫の瞳、四角い顔にどぎつい厚化粧を凝らし、脂肪と肉髪をこれ

でもかと身につけた巨軀きよくの持ち主だった。紫のスイーラを纏まとい、どつかと椅子に座り、左右に傍仕はなえを侍らせて大きな羽うちわで扇がせている。自身は待ちかねた様子でそわそわと足踏みをしていた。「ジークはまだかい」

「ただいま参りました。ご機嫌いかがですか、おばあさま」
「遅いじゃないか！ さあ、もつとこちへおいで」

一同は熱烈に歓迎された。ひととおり紹介が済むと、代わる代わる窒息寸前のきつい抱擁を与えられ（リゼだけ逃れた）、じいじと検分するように顔を覗き込まれる。

「どいつもこいつもなかなか負けん気の強そうな眼をしているじゃないか。特に」
くわっ、と剥かれた眼が紅緒を射貫いぬいた。

「ベニオ・サガラ。あんたのことは聞いてるよ。小娘がえらい啖たん叫かをきつたそうじゃないか。あんた、アタシのかわいい孫を散々こき下ろしたんだって？ なんて言っただい。事と次第と内容によつちやあ黙もくつちやいないよ。引き潰つぶして丸めて焼いて食くつちまうから覚悟おし！」

鼻息も荒く、アビオンがどすの利いた声を轟とどろかせると、天幕てんまくがぐらぐら揺れた。

周囲がハラハラして見守る中、紅緒は癩癩かしくやくを起こしそうになっているリゼを制して前に出た。やや上向いてアビオンの顔をまっすぐに見つめ、眼を合わせる。紅緒は怒っていた。

「……いつもそうなんですか？ 王太后陛下のような地位も力もある方が、なんにでも首を突っ込んで庇かばっていたら王子の性格が歪よこしまむの無理はありません。悪いものは悪い、善いものは善いとちゃんと教えなかつたのでしょうか。王子の女性蔑視じよせいべつしの原因はそういうところにあるんじゃないんで

すか？ 私が王子になにを言ったのかを問題にする前に、王子が私に対してなんて言ったのかを問題にするべきでしょう」
紅緒は言葉を切った。動悸どうきが激しい。すうつと息を吸って続ける。

「世の中には確かに残念な考え方をする女性もいますけど、そんな女性ばかりでもないです。これから先、王子がどんな方に心を惹かれて伴侶に選ばれるのかはわかりません。でもその方に対していま私になさっているように権威を振りかざし脅しをかけるなんて卑怯な真似はやめてください。怖おそくて言いたいことも言えなくなってしまう。そうなる健全な人間関係は生まれません。いつも心を押し殺した状態では、仲のいい夫婦になるなんて無理です。絶対にうまくいきっこない。対等な間柄じゃないと一生一緒になんて暮らせません。お互いを尊敬いっけいし慈あやましみ労いたわり合あう——そんな当たり前のことでもできないようでは困るでしょう？ 王太后陛下が本当に王子を愛していらつしやるのなら、黙もくつて見守みまりてあげてください。そして王子から助けてほしいと願ねがわれたときになつてあげてください。私もそうします」

場が水を打ったようにシン、となった。気味が悪いほどの静寂。アビオンの護衛を務める兵士や傍仕はなえ、侍女らは完全に色を失っている。

アビオンが無言のまま立ち上がった。肉の塊が意外なほど滑らかな動きで紅緒との距離を詰める。そして紅緒の両脇をむんずと掴み、高々と持ち上げた。

「きやつ」

「……このアタシに一席ぶつなんていい度胸をしているじゃないか。気にいった！ あんたをジーク

「皆に言っておく！あとでこの場にいない奴らの耳にも入れておきな！ここにいるベニオ・サガラはアタシのお気に入りだ。手も足も出さんじゃないよ。言いつけを破った奴は地位も財産も名誉も職もなにもかも剥奪してやるからね。わかったね？」

宣告がひとびとに伝わったのを見取ってアビオンは続けた。

「さあ、お待ちかねのゲームをしようじゃないか。皆、隣の奴と二人組になりな！」

紅緒はすぐさま肩を抱かれた。ジークウィーンだ。

「よし、それじゃあ手を繋ぐんだ。ここに、裏にアタシの名前の一文字を記したカードがある。このカードは会場のおちこちに隠されているから、それを見つけてアタシの名前をつくるんだ。交換もありだよ。『アビオン』、この四文字四枚一組をたくさん作った奴が勝ちだ。子供の場合はハンデとしてカードの数を倍にして数えてやるう。制限時間は一時間。但しケンカはご法度。手を離しても失格だ。二人仲よく。いいね？優勝者には豪華な宝袋を用意したよ！さ、張り切っていきな！」

ひとびとが賑やかにばらけていく。駆け出すもの、くつつくもの、方角を決めかねるもの、色々だ。アビオンはむふーっ、と息を吐くと、早速腕まくりをした。

「さて、と。リゼはこっちだ。ダナン、酒を持ってきな！アタシの酒をありったけ全部だよ。んなにをぐずぐずしてるんだい。あんたたちはさっさとおいき。ほらほらほらほら」

十指にそれぞれ指輪を嵌めた肉厚の手でしっし、と追いやられる。紅緒は肩越しにリゼを振り返った。リゼは複雑な笑みを浮かべつつ、軽く片手を上げている。紅緒はかける言葉を選びあぐねていた。先程の「妻云々」のやり取りの熱が、まだ燻っている。

……気にするほどのことじゃないのかもしれないけれど。

ちよつとは本気だったのか、それとも他愛のない冗談だったのか。知りたいような、知りたくないようなと曖昧に揺れる心のせいで気分がざわざわとして落ち着かない。

そんな紅緒を、「行くぞ」とジークウィーンがやや気色ばんだ声で促した。

チビクロが「にー」と鳴き、肩にのせろと催促してくる。

「競争しようか？」

爽やかに言ったのはカトラーでその手はジーチェと繋がれていた。

「受けて立ちますのー！」

敢然と応えたアルデイの手は、ラヴェルにしっかり握られている。

「面白い。負けたら奢りだぞ」

ジークウィーンが不敵に笑い、拳を持ち上げた。全員の拳が空中でごっつん、と突き合わされる。紅緒が空いている左の手を差し伸べるとチビクロが定位置の左肩に駆け上がった。

「ゲーム開始だ」

四

ラヴェル・イングレッサは勘のいい男だった。

ぶらぶらと歩いているだけのように見えて、先程から次々にアビオンカードを発見している。花輪の陰、ティーキャディーの中、道化師の帽子の罅、待機中の輿の屋根、そして行き交う給仕たちに声をかけてはカードをせびる。

また一枚増えた。アルデイの手には既に十数枚ものカードがあつた。隣を歩くラヴェルは絶え間なくしゃべり続けている。話の内容は多岐にわたっていたが、あまりにも長舌を振るうので、途中で相槌を打つのもばかばかしくなつた。適当に聞き流しながら手元のカードを一枚一枚捲る。

裏にはアビオンの名前の一文字。

表には国の七大憲法、王族のしきたり、主要都市の概要などが簡単に記載されている。

——なにかただのお遊びではないように感じるのは気のせい？

アルデイは首を捻つた。

カードは凝つた作りになつていた。貴族位に関すること、歴史、魔法、婚姻制度、現在の流通機構など、あらゆる分野にわたり、これらの情報を網羅すればかなりの豆知識になるだろう。

「遊びの中に遊びじゃない思惑が混じっているようですねえ」

ラヴェルの長い指が器用に動いた。どこから見つけたのか、新たに二枚が扇状に広げられたカードに足される。他愛のないことをとりとめなく話していたラヴェルが、いつのまにかじつとアルデイを見つめていた。

「その思惑ってなんだと思いますの？」

「たぶんあなたと同じ考えですよ」

ダスタ・フォーンに關係するすべて。理解が深まれば深まるほど、ひとに土地に物に愛着が湧く。「お姉さまのためですの？」

「おそらく。よくできてはいますが、我々にとつては常識的なことばかりです。こんなものを必要とするのは教育課程にある子供か異世界人くらいでしょう。それにしても、王太后陛下はまったく油断のならない方ですねえ。ゲームなどと言ってますが、わざわざこんな手の込んだカードまで用意しているくらいです。ベニ才殿のことを色々と調べたに違いありません」

喉の渴きを覚える。なぜか突然カードが恐ろしいものに思えてきた。

「……もしもこのカード一式を贈られたら、お姉さまは喜んで受け取るに違いありません」

「それが目的でしょうね。そして狙いはその遙か先にある……あーあ、やられましたね。師よ、飲んだくれている場合じゃないですよ。うかうかしているとベニ才殿は王家の連中にさらわれ……あれ、どうしました？ 顔色が優れないですよ？」

アルデイは急に動けなくなつた。呼吸がうまくできず、胸苦しさに襲われる。

「気分が悪いのですの」

「それはいけない」

ラヴェルはアルデイの手を離すと、膝下から掬うようにして抱き上げた。そのまま救護室に駆け込む。

アルデイは簡易ベッドに横になり医者の手当てを受けながら、ゲームから脱落したことをラヴェルに謝つた。

「いいんですよ、別に。私はあなたの身体の方が心配です」

いつもの口先ばかりの軽々しい言葉ではなく、心からそう言っているのが伝わってきた。途端に間近で顔を覗き込まれていることが気恥ずかしくなった。

ラヴェルは丸椅子に気取りなく腰かけて、ただアルディを眺めている。知的な茶の瞳、さらさらした短い髪。

宮廷魔法使いの正装に身を包み、星の杖を手に行っている姿は、かなり様さまになっていた。アルディはひそかに動揺した。黙っていれば相当の美形だ。女性が騒ぐのも無理はない。

「退屈ですか？」

アルディの思いからだいぶ外れたことを言って、ラヴェルは片手をひらめ閉かせた。指の間にアビオンカードが挟まれている。それを表裏ひっくり返し、もう一度同じことをしてからシャッフルした。広げる。すると文字の部分部分がアルディの似顔絵に変わっていた。

「おやおや、おかしいですね」

またシャッフルする。だが切るそばからカードが空中に舞い上がり、金色の小さな花になって降ってきた。救護室に驚きの声上がる。ひとびとの手に触れると、花はボンと弾けて豆粒大のカエルになり、あちこちでカエルの合唱がはじまった。体調を崩して元気のなかった子供たちが大喜びでカエルを追っかけまわす。笑い声がさざめく。捕まえると元のカードに戻るそれをラヴェルは回収し、代わりにお菓子を渡していく。

「元氣出ました？ 具合はどうですか」

アルディの傍に戻ったラヴェルには、子供たちが大勢くっついてきていた。よほど面白かったのだろう。眼を輝かせて魔法の小品をねだっている。

「こちら。引つ張るのはよしなさい。君たちも元氣になったでしょう。さ、表にいった、いった」

アルディは笑い転がっているうちに、すっかり気分が晴れていた。ベッドを下りて身なりを整える。

「動いて平気ですか？」

「はいですの。もう大丈夫そうですの。お手数をおかけしましたの。ありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして。さ、そろそろゲームが終了している頃です。戻りましょうか」

さりげなく差し出されたラヴェルの腕に、アルディはおずおずと手を添えた。

「……今日はなんだか頼もしいですの」

「心外な。私はいつだって頼もしいでしょう。ただあなたが私を頼ってくれないだけで」

外に出ると空は鈍いだいたい橙色に輝いていた。刷毛はけでなぞったような薄い雲がほぼ直線状に太陽まで伸びている。黄色味を帯びた光線が淡く庭園を照りつけ、黄昏たそがれの到来を告げていた。

アビオン王太后の紫の天幕前ではちょうどゲームの表彰が終わったところだ。どうやら勝者は幼い兄妹のようだった。拍手と祝福の声。宝袋の贈呈。二人はアビオンに頭を撫でられている。

「師もどうやら引き分けたようですね」

「そうですね？」

「ええ、たぶん。時間が足りなかったんでしょう。飲みすぎてないといいんですけどね」

ラヴェルは眉間に皺を寄せてなにやらぶつぶつぶつ言っている。この師弟はなにかにつけ虐いたげたり虐

げられたりしているのに、それでも関係は良好のようだ。

「なにかはじまるようですよ」

「え？」

慌ててラヴェルの視線の先を辿る。通行専用だった左側の沿道だ。見学用の馬車や馬、輿こしが撤去され、いまはなにもない。そこへジークウイーンと紅緒が進み出て、観衆に向かいお辞儀をした。

「あ、まさか」

そのまさかのようなだった。ジークウイーンと紅緒は向かい合うと男女逆の礼をする。微笑を交わしホールドを決める。その形もまた男女逆のため、招待客の間にざわめきが広がった。

右側の沿道中央で出番を待っていた音楽隊指揮者の指揮棒が勢いよく振り下ろされる。華やかな音が、一気に奔流ほんりゅうとなって流れはじめた。

紅緒のリードで颯爽さつそうと踊りはじめる。男女逆バージョンのストレート・ライン・ステップだ。

「わあ」

「見えますか？」

ひょいとラヴェルの肩に担かたぎあげられる。びっくりしたものの視界が開けたことに感謝した。

「きゃああ！ お姉さま、すてきですよー！ 頑張つてですよー！」

紅緒が笑顔全開でアルデイの声援に応える。アルデイの声を皮切りにあちこちで二人の名が叫ばれはじめた。音楽を掻き消すような大歓声の中、ジークウイーンと紅緒は眼のまわるようなターンの嵐と優雅な浮き沈みを繰り返し、一糸乱れず完璧に踊りきった。

拍手喝采かっさいが二人を迎える。

アルデイもラヴェルの肩の上で熱狂しながら手を叩いていた。

「あんまり暴れると落ちますよ。もう降ろしますよ」

「え？ あ、きゃあつ。ご、ごめんなさいですの。お、降ろしてくださいですの！」

夢中になって気づかなかつたが、かなりの注目を浴びていた。

さりげなくラヴェルがアルデイを引き寄せ、衣装の長い袖で姿を隠してくれる。嬉しさと興奮と恥はにかみずかしさに真っ赤になって掌てのひらで顔を覆うアルデイの耳に、ラヴェルの弾んだ声が届いた。

「よかったですね」

「な、なにがですの」

「ガーデンパーティ、大成功じゃないですか。皆、いい顔で、私まで嬉しくなります」

それは本当だった。大人も子供も満面の笑顔だ。ジークウイーンを称たたえる声、王家万歳の声がいつまでも絶えない。ジークウイーンも紅緒も大勢に囲まれて笑っている。

日没が迫る。たなびく雲がえもいわれぬ色合いに染まっている。

誰かが空の一点を指差した。それを合図にひとびとが次々に頭上を仰ぐ。虹がかかっていた。

「ささやかですが、私からの祝福です」

こっそりとアルデイに耳打ちしたのはラヴェルだ。

黄昏たそがれる天上に七色の光の橋が大きな弧を描く。その光景はひどく美しく、アルデイは胸を打たれた。

「……感動しましたの。とってもきれいですの……」

ラヴェルがやや照れたように笑う。その無邪気な、子供のような瞳にどきっとして、アルディは慌てて眼を逸らした。

それからまもなくジークウイーンによってガーデンパーティー終了の挨拶があり、解散が告げられた。名残惜しそうな招待客を見送った後、速やかに片付けに入る。ラヴェルはアルディの身を案じて、最後まで傍を離れなかった。

五

リゼとジークウイーン、そしてチビクロは、紅緒の提案で東屋あずまやに来ていた。

リゼは柱の台座付近に足を投げ出して座ると、空を見上げた。澄んだ夜気が心地いい。夜空には二つの月が煌々こうこうと照り耀かがやき、無数の星が瞬またたいている。中庭は昼間の喧騒が幻のように思えるほどひっそりと静まり返っていた。

「今日はお疲れさまでした」

「さつきも同じことを言ったぞ」

「いいじゃないですか、何度言っても」

紅緒は持参した柄の細いグラスを、ジークウイーンのそれに献杯する。次にリゼ、最後にチビクロだ（猫用に皿を持参した）。入浴後の火照ほてった顔に浮かぶ微笑は瑞々みずみずしくどこか艶つばい。

リゼと紅緒は、数日前から就寝前のひとときをジークウイーンと共に過ごすことになっていた。

当然ながらリゼは猛反発したのだが、結局紅緒に押し負けてしまった。

「わあ、すごくおいしい」

「気に入ったならあとで同じものを届けさせる。今日の……礼だ」

「ガーデンパーティー、成功してよかったですね。皆、とても喜んでいました。私も楽しかったです」

「ああ、私も楽しかった……」

珍しく険のない態度だとリゼが思った矢先、「だが」とジークウイーンはしかめ面が続けた。

「いきなり踊ろうと言いだしたのにはまいったぞ」

「あれは王太后陛下が見たいとおっしゃったんです。私が言い出したわけじゃないですよ」

「わかっている。あの手の余計なおはあさまに耳打ちするのはカトラーに決まっている」

「うまくいったからいいじゃないですか」

「心の準備というものがあるだろう」

口ではぼやきながらも、満更でもない様子だ。

紅緒がリゼに目配せしてきて「素直じゃないよね」とこっそり言った。紅緒は結構いけるクチで、すすいと一杯目を干し二杯目を注いでいる。

「そういえば、さつき王太后陛下にゲームで使ったカード一式をちょうだいしたんです。色々面白いことが書いてあって勉強になりますよ」

「そんなもの捨ててしまえ！」

「リゼ、そういうことを言わないの。贈ってくれた相手に失礼でしょ」

「そうは言っても、あれは百書あって一利なしの代物なんだっ」

「なんで？」

「なんでもだ！」

「変なりゼ」

「はははははははは」

突然、ジークウイーンが声を立てて笑ったので、リゼも紅緒もびつくりして口を閉じた。

「笑うな」

リゼが睨んでもどこ吹く風で、ジークウイーンは夜陰に笑い声を響かせている。つられたのか、紅緒まで笑いはじめた。

「ベニオが相手ではリゼも苦勞するな」

ややあつて笑いを収めたジークウイーンからわかったように言われ、むっとする。リゼはさっと立ち上がると、二人をその場に残して奥の石造りのベンチに向かった。身体を横に向け、懐に忍ばせていたものを丁寧に取り出す。

今日の分の紅緒の手紙だ。昼間ジーチェから受け取ったものの、時間がなくて読めずにいたのだ。夜目が利くりゼは、それを手の中で広げた。ラヴェルの提案ではじめた手紙の交換は毎日を新鮮なものに変えた。些細なことも文章として綴ると紅緒から反応が返ってきて、それが思いがけない会話を生む。そのたびに心の距離が縮まっていくようだった。

「ふ」

と顔がにやけてしまう。手紙の最後は「今日は楽しく頑張ろうね」という紅緒らしい一文で括られていた。何度も何度も読み返す。こんなことがあったよ、あんなことがあったよ、と教えてくれるので、自分がいないところでも紅緒がなにを見てどう感じ過ごしているのかがわかって嬉しい。

ふと、懇意にしていた老婆、エメットを想った。もう喪って何年にもなる。偏屈で口うるさくてお節介で、リゼを実の息子のように愛してくれた老婆の言葉が、胸を掠めた。

『結局のところ、人間は愛し合うことでしか幸せになれないのさ』

だから愛する相手を見つけると、何度も言われた。彼女の言っていたことがいまになって身に沁みてわかる。

紅緒を見る。ジークウイーンとなにか口論しており、まわりでチビクロがあたふたしている。一国の王子を相手にまるで遠慮がない。飾り気のないまっすぐな姿を美しいと思う。

ただ傍にただで優しい気持ちになれる。いつまでも一緒に笑って過ごせればいい。それだけで十分だ。

愛おしいという気持ちを教えてくれた……大切なひと。

「誰にも渡すものか」

手紙をたたみながら呟き、戻ろうと一步踏み出したそのときだ。

「なにをする！」

ジークウイーンが叫ぶ。眼をやると、紅緒がいきなりラミザイの上衣を脱いでいた。

「ぎゃーっ。なにしてるの、ベニオっ。見たいけど見せたくないからやめてくれー！」
すっとなんでいってジークウイーンとの間に割り込み、半裸の紅緒を胸の中に隠す。

「暑いです。全部脱ぎます」

「頼むからやめてくれ！」

「暑いのに！ 脱ぐの！ 邪魔しないでください」

「だめだだめだだめだつたら、だめだつ。ジーク、あなたベニオにどれだけ飲ませたんですかっ」

「私は止めた。口当たりがいいから飲みやすいが、強いからな。そこらへんにしておけと言ったのだが……持ってきた二本とも全部いった」

「は？ こ、この短時間で二本全部飲み干したんですか？」

普段の酒量よりも格段に多い。紅緒は既に酔いがまわっているのか、頬を上気させている。だが眼は異様に据わり、頑なに「暑い暑い」と唸って暴れた。

「帰りますよ」

問答無用でリゼは紅緒を肩に担いだ。それが気に食わなかったのか、ぽかぽかと背を叩かれる。

「はーなーしーてーくください」

「だめ。帰って寝よう。明日も早いんだから散歩はこれでおしまい。ジーク、とつとと来なさい。

チビクロもです。まったく無茶するんだから……ああ二日酔い薬を調合しないと」

すたすた先を行くりゼのあとを、撤収作業を終えたジークウイーンとチビクロが追う。

「ジーク、か。久々に私の名を呼んだな……」

「なにか言いました？」

「なんでもない。いや、そうだな、そうしよう。明日からベニオにも私を名前で呼ばせよう」

「は？ なにを……」

「そうだそれがいい。アルデイやジーチェにもそうさせよう。なにせ私たちは仲間だからな」

「にー」

「おまえもいたか。よし、特別に許そう。おまえもジークと呼ぶがいい」

そしてチビクロの首根っこを掴み、いつも紅緒がするように自分の左肩にのせる。

リゼは頭が痛くなった。すべての面倒事の元である紅緒は、いつのまにか遠く夢の国へと旅立ってしまった。かわいさあまり余って憎さ激減、リゼは大きく溜め息を吐く。

「あのな」

「なんです」

「おばあさまの言ったことは気にするな」

「なんのことです？」

「ジークウイーンは慰めるように言った。」

「リゼは年寄りじゃない」

「あたりまえだろう！ 俺は年寄りじゃないっ」

思わず素に戻ってリゼは怒鳴り散らした。

チビクロが「に」と同情的にひと声鳴いたが、その瞳はおかしそうに笑っていた。